

対人関係における外向性の 直接的効果について

水 野 邦 夫

パーソナリティ研究において、「外向性」は最も多く取り扱われてきたもののひとつであり、心的エネルギーの方向性をもとに人を外向型－内向型に分類するというJungの考え方（向性説）などは、多方面に影響を与えてきた。尤も、向性説は思弁的・主観的なところが多く見受けられたため、実証主義的な心理学者から受容されない面もあったが、その一人であるEysenck(1960)もこの基本的な部分は受け入れて、自己のパーソナリティ理論にも取り込んでいる。またアメリカを中心に広まった特性論的見地によるパーソナリティの因子分析的研究においても、「外向性（ただし、高潮性(surgency)と命名されることもある）」が根源的特性の一要素に数えられているのが常であり（Cattell, 1977 ; Guilford, 1975 ; 辻岡, 1982）、さらに、近年わが国でも盛んに唱えられるようになった「性格の5因子説(Big Five)」においても、外向性がその1因子を構成しているという報告は数多くなされている（Norman, 1963 ; 和田, 1996 ; 村上・村上, 1997）。

ところで、一般に外向性は対人関係にとってとくに重要な性格特性であると考えられており、多くの心理学者もそれを支持してきたようである。たとえば詫摩(1981)は外向的な人物について、「広い範囲の人と交際し、流暢な弁舌と巧みな機知をもって明るく談笑することを好む(p. 8, /)」と解説している。またHendrick & Brown(1971)や中里・井上・田中(1975)は、外向的な人物は内向的な人物よりも好まれやすいことを見出しており、さらに多くの社会的スキル（対人関係を適切に処理する能力）に関する研究において、社会的スキルと外向性の間には高い正の

相関関係が認められている（榎野，1988；菊池，1988）。これらのことからわかるように、外向性は対人関係を円滑に処理する（うまくやっていく）ことと強い関連があると考えられる。

しかしこれに対して、外向性が本当に円滑な対人関係に影響するのかを疑問視する研究もいくつかみられる。たとえば中村(1984)は、とくに内向的な人物は外向者よりも内向者に対して「信頼できる」や「気が休まる」などと感じやすいことを見出している。また水野(1994a)は、外向的な人物がどのようなときに有利であるかを自由記述法で尋ね、その回答を分類した結果、有利な点として対人関係の開始に関する回答（例、初対面の人と友だちになるとき）が最も多かったと報告している。さらに水野(1995a)は、外向的な人物はいっしょに活動するグループの中に「よくなじんでいる」とみられている反面、「信用できる（うそをつかない、約束をきちんと守る）」人物としてはみなされにくいことも見出している。これらのことは、場合によっては内向的な人物の方がよく思われることや、また外向性が単に対人関係の開始の際に有利に働くだけであって、比較的長い関係のなかにあっては必ずしも重要な役割を果たしていない（もしくは果たし得ない）ことを表しているといえよう。

このようにみていくと、外向性が対人関係の円滑な処理と関連するという知見には、いくつかの問題点も存在するようである。そこで本研究では、まずはじめに、ソシオメトリックな方法を用いて、外向的な人物が周囲からどのような評価をされているのかを調べ、グループ内の良好な対人関係に外向性がどれほどの重要性を有するかを検討した。次に、外向性との関連が高いとされる社会的スキルの要因を統制した場合、外向性が良好な対人関係にどの程度の影響力を持つのかを、質問紙調査を通じて検討を行った。

研 究 1

本研究では、ソシオメトリックな調査をもとに、外向的な人物が集団

のなかでどの程度受容されているかを調べ、それをもとに、外向性と対人関係の円滑な処理との関係について、再検討を試みた。

方 法

調査対象 京都市内の専門学校に通学する学生88名（計2クラス、各44名）に対し、調査への協力を求めた。なお各クラスの年齢の平均および標準偏差は、一方のクラス（以後クラス1と称す）は21.68および3.75、他方のクラス（以後クラス2と称す）は25.98および4.68であった。また、各クラスともほとんどが女子（男子は各2名程度）で構成されていた。

質問紙 調査にあたり、以下の質問紙を用いた。

1) **調査票** 各クラスの名簿を作成し、クラスの中で「とても仲のよい友だち」や「人当たりがよいと思う人」などをそれぞれ上位3名ずつ選択させ、名簿上の該当者の欄に記号（第1位には3重マル、第2位には2重マル、第3位にはマル）をつけて回答する方式の調査票を作成した。

2) **矢田部—ギルフォード性格検査** 12の性格特性を測定するために構成された、120項目からなる尺度（辻岡, 1982）であり、わが国における代表的な性格検査のひとつである（以後Y G検査と略記）。

手続き 新学期から約1ヶ月後、心理学の授業時間の最後に調査票への回答を求めた。なお回答は無記名で行い、回答内容を同時に配布した封筒内に入れて提出するように指示した。

次に新学期開始から約2ヶ月後、同じく心理学の授業時間の最後に、Y G検査を行った。

結 果

調査票の集計 調査票の各問について、各クラスの成員ごとに被選択数を算出した。なお集計にあたっては、被選択順位に関わらず、選択されたごとに1ずつ加算していった。

ほとんどのケースで、被選択数の最頻値および2番目に頻度の高い値は2か3のいずれかであった。そこで、被選択数が4以上の者を「被選択数の多い群」、1以下の者を「被選択数の少ない群」とした。なおクラス1における「人当たりがよいと思う人」の間については、最頻値および2番目に頻度の高い値は1および2であったので、このときに限り被選択数が0の者を被選択数の少ない群、3以上の者を多い群とした。

以後の分析では、被選択数の多い群および少ない群の該当者のみを対象とした。

社会的外向性と被選択数の関係 YG検査の中の「社会的外向尺度」について、各被調査者の得点を算出した。つぎに辻岡(1982)を参考に、これが14点以上の者を「外向者群」、それ未満の者を「非外向者群」とした。2（被選択数の多寡）×2（外向－非外向）のクロス表をTable 1に示す。

Table 1 被選択数と外向性の関係（クロス表）

	とても仲のよい友だち		人当たりがよいと思う人	
	多 い (4 ≤)	少ない (1 ≥)	多 い (3 ≤)	少ない (1 >)
クラス1 (被選択数)				
外向性群	4	0	6	1
非外向性群	4	5	5	11
クラス2 (被選択数)	(4 ≤)	(1 ≥)	(4 ≤)	(1 ≥)
外向性群	9	4	6	7
非外向性群	4	5	3	7

註：表中の数字は度数（人数）を表す。

群間の人数比の差を調べるために、各クラスの各問ごとにFisherの直接法による検定を行った。その結果、クラス1では「とても仲のよい友だち」、「人当たりがよいと思う人」双方の問で有意な差もしくは差の傾向が認められた（それぞれ $p < .10$ 、 $p < .05$ ）が、ともに被選択数の少ない群では、非外向者群の方が圧倒的に人数が上回っているのに対し、

多い群では外向者群と非外向者群に属する人数がほぼ同数であった。このことから、外向性は被選択数の少なさに影響しているが、被選択数の多さには必ずしも影響していないことが窺える。またクラス2では、各問とも有意な差が認められず、被選択数と外向性の間の関連性はかなり希薄であると考えられよう。

考 察

この調査は学期の開始から1ヶ月程度経過してから実施されており、お互いの対人関係は初期の段階にあると考えられるものの、開始期よりはやや関係の進展した状態にあると考えられる。そのような時期において、多くの人から「仲のよい友だちである」とか「人当たりがよい」とかいうように認知されることは、その人がグループ内の対人関係を適切に行っていることの表れとみることができよう。本研究ではそれへの外向性の影響を調べたが、外向性は、対人関係の円滑な処理に期待されるほどの影響力を持っていないことが窺える。またクラスによる違いもみられ、クラス1では外向性が被選択数に何らかの影響を与えていると考えられるのに対し、クラス2ではそのような傾向が認められなかった。これらのことから、対人関係の円滑な処理には、外向性以外の要因が強く関与している可能性が示唆されよう。

研 究 2

はじめにも述べたように、多くの研究では外向性と社会的スキルの間に高い関連性を認めている。ここで両者の違いについてみると、外向性は性格特性のひとつであり、その人固有の安定した行動傾向であるといえる。それに対して社会的スキルは、他者と適切な人間関係を築いていくための一種の技術であり、学習によって獲得できるいわば可塑的な能力であるといえる。もちろん外向的な人物は社会的スキルを身につけやすいと考えられる（菊池・堀毛, 1994）が、このことは外向性が良

好な対人関係を築く必要条件であることまでを意味しているものではないであろう。すなわち、外向的な人の人づきあいがうまくみえるのは、その人物が高い社会的スキルを有しているからであって、外向性の効果はそこにほとんど影響しないとも考えることもできよう。そこで本研究では、社会的スキルの要因を統制することで、外向性の対人関係への直接的な効果を調べることを目的とした。

方 法

調査対象 京都府および奈良県内の2大学において、心理学関係の科目を受講した大学生に対し、下記質問紙への回答を依頼したところ、405名（男子240名、女子165名）が記入洩れなく回答した。

質問紙 調査するにあたり、質問紙を作成した。

質問紙の具体的な内容は、「まずはじめに、同性で同世代の友だちを1人だけ思い浮かべて下さい。」という教示文の後に、1)その人のイニシャル、2)友だちづきあいをはじめてからの期間（何年何ヶ月になるか）を尋ね、引き続き、3)その友人に対して以下の感情や態度をどれくらい持っているか（その人のことを尊敬している、その人といっしょにいると安心感を感じる、その人の存在は自分にとって重要である、その人の人間関係には満足している、その人と親しい（仲がよい）、その人を信頼している）、4)Y G検査の社会的外向性に関する各項目についてその友人がどれくらいあてはまるか、5)菊池(1988)の社会的スキル尺度(KiSS-18)の各項目についてその友人がどれくらいあてはまるか、などを尋ねるものであった。なお3)から5)については、評定法（7段階評定）による回答形式をとった。

手 続 き 上記の質問紙を講義時間中に被調査者に配布し、回答のうえ1週間後に持参するように指示した。

結 果

外向性の指標として、YG検査の社会的外向尺度の得点を、社会的スキルの指標としては、KiSS-18の得点をそれぞれ用いた。なお、各尺度の内的整合性を調べるために、Cronbachの α 係数を算出したところ、社会的外向尺度は $\alpha = .850$ （因みに男子 .849、女子 .836）、KiSS-18は $\alpha = .914$ （因みに男子.908、女子.919）であった。

また良好な対人関係の指標については、友人に対して有している感情や態度に関する6項目を用いるために、まずこれらについて因子分析（主成分解、ヴァリマックス回転）を行った。Guttman基準により因子を求めると、1因子のみしか得られなかったため、これらの項目を1次元性のものと判断した。続いて内的整合性を検討するために先と同様にCronbachの α 係数を算出したが、「その人のことを尊敬している」という項目が全体の係数値を下げる傾向にあったので、これを除いた5項目の合計得点（ただし $\alpha = .842$ 、男子は.801、女子は.884）を対人関係の良好度の指標とした。

変数間の相関 外向性、社会的スキル、対人関係の良好度の3つの指標（変数）について、その関連性を調べるために、Pearsonの相関係数を算出した（Table 2参照）。その結果、先行研究にあるように、外向性と社会的スキルの関連性が高かった。なお、男女別にも同様の分析を行ったが、男子において外向性と良好度の相関がやや低かった（ $r = .192$, $p < .001$ ）ものの、他は概ね同様の結果が得られた。

Table 2 各変数間の相関

	対人関係の良好度	外 向 性
外 向 性	.282 ***	
社会的スキル	.400 ***	.625 ***

註：*** $p < .001$

ところで、先行研究の多くは、とくに外向性と社会的スキルの相関について、自己評定データをもとに分析を行っているが、本研究のように、他者評価データでも高い相関関係がみられたことから、自他双方の判断において両者の関連性が高いということが窺えよう。

また、両変数とも対人関係の良好度と有意な正の相関関係にあり、これらが良好な対人関係と関連性が高いとする過去の諸研究に沿った結果であるといえる。

重回帰分析による検討 外向性や社会的スキルが良好な対人関係にどのように影響するかを調べるために、社会的外向尺度の得点およびKiSS-18の得点を説明変数、対人関係の良好度の合計得点を基準変数とした重回帰分析を行った。その結果をTable 3に示す。これからわかるように、外向性の良好な対人関係への効果は、社会的スキルの要因を統制することによって、ほとんどなくなっているのがわかる。なお、男女別にも同様の分析を行ったが、結果はこれとほとんど同様であった。

Table 3 対人関係の良好度を基準変数とした重回帰分析

	β
外向性	.053
社会的スキル	.367 ***
R	.402 ***

註：*** $p < .001$

考 察

外向性との関連が高いとされている社会的スキルの要因を統制することで、良好な対人関係に及ぼす外向性の効果はほとんどみられないという結果となった。このことは、本来外向性は、良好な対人関係を築くこととそれほど関係がないにもかかわらず、外向性と社会的スキルの関連

性が高いために、社会的スキルの（良好な対人関係への）影響力がそのまま外向性の影響力とみられてしまうのではないかという仮説を支持したものであるといえよう。

また、社会的スキルの良好度への直接的効果が強かったことから、社会的スキルを形成するのに直接影響力を及ぼすものとして外向性があり、外向性は対人関係の良好度に対する間接的な効果を有するというモデルを想定することができよう。しかし、このモデルとはあまり適合しない研究例もみられる（鈴木, 1992 ; 水野, 1996）ことから、今後さらに検討する必要があるだろう。

総 合 考 察

上記2つの研究から、外向性が良好な対人関係と関連する、もしくは前者が後者に影響するという、従来の仮説はあまり支持されず、むしろ外向性は良好な対人関係には少なくとも直接的には影響しないという結果となった。しかし一般には、外向性は人間関係を円滑に行っていくのに重要な性格特性であるという「信念」は強く、たとえば入学・就職試験などの面接において、「私の長所は明るいところです」というように、外向性が一種のセールスポイントとされることもまれではないであろう。その中にあって、今回の結果はどのように考えるべきであろうか。

ここで外向性の定義について考えると、Jungによれば、「あるひとの関心や興味が外界の事物やひとに向けられ、それらとの関係や依存によって特徴づけられている（河合, 1967 p. 41）」ことである。すなわち、外向性はあくまでも関心が外に向かうという個人的な傾向を指しているのがわかる。そして同時に、そこには他者の存在や行動に対する他者からのフィードバックが考慮されていないことが理解できよう。より極端に言えば、その人が外向的であるかどうかは、自分が外界にいる他者に対して強い関心を示すかどうかによって決まり、相手がそれによって好意を抱こうが嫌悪感を抱こうが関係はないわけである。他方、対人関係

を良好に保つためには、自分の関心だけではなく相手の反応も考慮する必要がある。それゆえ、外向的でありながら他人に配慮できない（＝良好な対人関係が築けない）というケースが起こり得ても不思議ではないわけである。

にもかかわらず、「外向的＝良好な対人関係を築ける」という図式が広く信じられるのはなぜであろうか。これはひとえに、彼らが初対面の相手と比較的困難なく談笑できるからではないかと思われる。はじめに、水野(1994a)が外向的な人物の有利な点を尋ねた際、新しい環境への適応しやすさが最も回答が多かったことを述べたが、外向的な人物はとりあえず外に向けて自己を表出していくために、他者と接点を持つのは容易となり、これが一見して対人関係を築くのに長けているという印象を与えやすいのであろう。そして他者と接する機会が増えることで、社会的スキルを向上させる機会も同様に増え、対人関係を円滑に処理するという結果に到達しやすいのであろう。

しかし外向性は、とくに日本文化において、良好な対人関係を阻害する恐れのあることは、いくつかの指摘から考えられる。Jung自身、日本人の属する東洋文化圏では、内向性を重視する傾向にあると論じているようである（河合, 1967）が、近年わが国においては、欧米文化とは異なった社会的スキルの存在を模索する研究が増加している。たとえば堀毛(1994)は、剥き出しの自己表出を避けた日本的なスキルを「人当たりの良さ」という語で表現している。また水野(1994b)は、「自己主張をする人」に関する対人認知が、たとえば「人あたりのよい人」に関するそれと大きくずれており、後者は「友好的」ととらえられやすいのに対して、前者は「気が強い」ととらえられやすいことを報告している。さらにMidzuno(1997)は、人あたりのよい人物が高い社会的スキル評価を受けるのは、その積極性よりも協調性による部分の方が大きいことを見出している。すなわち、自己主張や積極性の強さは、わが国においては必ずしも歓迎されない可能性があると考えられるわけである。外向的な

人物が外界に関心を向ける限り、自己主張が強くなる可能性は十分に考えられよう。その部分をうまくコントロールするためのスキルが外向的な人物に備わりやすいか否かについては、あまり研究がなされていないようである。

さらに中村(1984)や水野(1995a,b)などから、外向性と対人的信用との関連性が低いことが示唆される。「人にして信なくんば、其の可なることを知らざるなり（『論語』 為政第二）」というように、信義が対人関係の基礎にあることは、古来より今日に至るまで、これも信念のように唱えられている。現にArgyle & Henderson(1985 吉森編訳, 1992)は、「相手のプライバシーを尊重する」や「他者と秘密に話したことをばらさない」などといった信義に関するルールが、文化や階層を超えて重要視されることを見出している。このような重要な部分において、外向的な人物の評価が高くないことは、彼らが対人関係を円滑に処理するという信念にさらなる疑問を呈することにもなろう。今後はこれらの点についても研究が期待されよう。

引用文献

- Argyle, M., & Henderson, M. 1985 *The anatomy of relationships*. London : Penguin.
- (アーガイル, M・ヘンダーソン, M. 吉森 護 (編訳) 1992 人間関係のルールとスキル 北大路書房)
- Cattell, R. B. 1977 *The scientific analysis of personality and motivation*. New York : Academic.
- Eysenck, H. J. 1960 *The structure of human personality*. Mephuen.
- Guilford, J. P. 1975 Factors and factors of personality. *Psychological Bulletin*, **82**, 802-814.
- Hendrick, C., & Brown, S. R. 1971 Introversion, extraversion, and interpersonal attraction. *Journal of Personality and Social*

Psychology, **20**, 31-36.

堀毛一也 1994 人当たりの良さ尺度 菊池章夫・堀毛一也（編著） 社会的スキルの社会心理学 川島書店 Pp. 168-176.

河合隼雄 1967 ユング心理学入門 培風館

榎野 潤 1988 社会的技能研究の統合的アプローチ(I)－SSIの信頼性と妥当性の検討－ 関西大学大学院「人間科学」, **31**, 1-16.

菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店

菊池章夫・堀毛一也 1994 社会的スキルとは 菊池章夫・堀毛一也（編著） 社会的スキルの心理学 川島書店, Pp. 1-22.

水野邦夫 1994a 対人関係における外向性の効用について 日本グループ・ダイナミックス学会第42回大会発表論文集, 224-225.

水野邦夫 1994b 対人関係における対象の行動パターンの諸様相 日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 294-295.

水野邦夫 1995a 外向者は対人関係を柔軟に処理できるか 同志社心理, **42**, 23-31.

水野邦夫 1995b 「人当たりのよい人」のイメージ及び特徴について 日本グループ・ダイナミックス学会第43回大会発表論文集, 244-245.

水野邦夫 1996 良好な対人関係に及ぼす社会的スキル及び性格特性の効果 同志社心理, **43**, 36-42.

Midzuno, K. 1997 A study on the Japanese social skill. *Collective Abstracts of the Second Conference of the Asian Association of Social Psychology*, 148.

村上宣寛・村上千恵子 1997 主要5因子性格検査の尺度構成 性格心理学研究, **6**, 29-39.

中村雅彦 1984 性格の類似性が対人魅力に及ぼす効果 実験社会心理学研究, **23**, 139-145.

中里浩明・井上徹・田中国夫 1975 人格類似性と対人魅力－向性と欲求の次元心理学研究, **46**, 109-117.

- 鈴木隆子 1992 向社会的行動に影響する諸要因－共感性・社会的スキル・外向性－
実験社会心理学研究, 32, 71-84.
- 詫摩武俊 1981 類型論 藤永保（編集代表） 新版心理学事典 平凡社 Pp.
827-828.
- 辻岡美延 1982 新性格検査法 日本心理テスト研究所
- 和田さゆり 1996 性格特性用語を用いたBig Five尺度の作成 心理学研究, 67,
61-67.

付 記

本研究の一部は、日本グループ・ダイナミックス学会第42回大会（於：九州大学）ならびに日本社会心理学会第38回大会（於：立教大学）において発表された。